

一橋大学大学院言語社会研究科
科学研究費補助金・基盤研究(B) 研究セミナー
「生表象の動態構造——自伝、オートフィクション、ライフ・ヒストリー」

20世紀フランス語圏文学における 《自伝的エクリチュール》の探求

尾崎文太 一橋大学大学院言語社会研究科

エメ・セゼール

『帰郷ノート』における人称の問題

久保昭博 京都大学人文科学研究所

レーモン・クノーの
自伝的エクリチュール

千葉文夫 早稲田大学文学学術院

ミシェル・レリス
あるいは自伝のパラドックス

コメンテーター 森本淳生 一橋大学大学院言語社会研究科

2011年1月29日(土) 午後1時30分より

一橋大学 国立・東キャンパス 国際研究館4階 大教室

(JR中央線「国立」駅下車 徒歩10分)

入場無料・事前予約不要

連絡先 森本淳生 (atsuo.morimoto@srv.cc.hit-u.ac.jp)

趣旨説明 13:30～13:40

エメ・セゼール『帰郷ノート』における人称の問題 13:40～14:30

尾崎文太

エメ・セゼールは、その故郷マルチニックにおいては、何より長きにわたってフォル＝ド＝フランス市長とフランス国民議会議員を務めた政治指導者であり、黒人として初めて高等師範学校に入学した黒人エリートとして認知されている。『帰郷ノート』はセゼールが1939年に書いた処女長編詩であるが、未来の黒人指導者がこの一人称で語られる詩作品においていかなる語り手を創造しえたかに関して、人称の問題を踏まえ政治と文学の関係の可能性を考慮しつつ考察してゆきたい。

レーモン・クノーの自伝的エクリチュール 14:40～15:30

久保昭博

1924年から1929年までシュルレアリスム運動に参加した後、小説『はまむぎ』（1933年）でデビューしたクノーは、その後、シュルレアリスムの自動筆記を念頭に置いた自我表出的なエクリチュールとしての「叙情詩」（そのなかに「自伝」も含まれる）を強く批判する。しかしその一方で、集中的に自伝的な作品に取り組み、「自伝三部作」としてまとめられる『最後の日々』（1936年）、『オディール』（1937年）、『柏と犬』（1937年）を書いた。「自伝」をめぐるこの両義的な態度は何を意味するのだろうか。本報告では、1930年代にクノーが展開した批評的言説と実作とをつきあわせながら、形式も内容もそれぞれ大きく異なるこれらの作品に通底する自伝的エクリチュールの軌跡をたどり直し、その意義を明らかにしたい。

*参考文献：久保昭博「レーモン・クノーの自伝的エクリチュール、あるいは消去の技法」、『文学作品が生まれるとき』（田口紀子、吉川一義編、京都大学学術出版会、2010年）所収。

ミシェル・レリスあるいは自伝のパラドックス 15:40～16:30

千葉文夫

フィクションをことごとく排し、あくまでも事実を書き記すこと、しかも書き記すことが場合によってみずからの立場を危うくする危険をともなう事実をあえて選び、いっさいの虚飾を交えずにこれを書き記すこと、そのためにはフォト・モンタージュのような書法こそがふさわしいとレリスは主張する。だがそのような意図をもって書かれたレリスの自伝的作品とデフォレあるいはバタイユが書くフィクションとの違いは必ずしも自明ではない。さらにまたマルセル・モースのもとで人類学を学んだ自伝作家は共同体の問題へと視線を向けようとしながらも、集団的次元にみずからをひきあげることができずに、個の夢想のなかに落ち込んでゆくことを意識せざるをえない。レリスの書くテキストは自伝的試みが孕むパラドックスを最大限かかえもっているように思われるわけだが、ここでは『成熟の年齢』および『ゲームの規則』第三巻をもとにこの点についての考察を試みたい。

コメント、質疑応答 16:40～18:00